

多様な学びと居場所づくり

社会福祉法人 岐阜羽島ボランティア協会
〒501-6232 岐阜県羽島市竹鼻町狐穴 719 番地 1

助成事業の概要

地域住民を対象に「多様な学びと居場所づくり」と題した研修会（全 4 回）を開催。支援現場で活躍する方々をゲストに迎え、対談と意見交流会を行った。

【第 1 回目】2023 年 5 月 28 日（日）13：30～16：00 羽島市福祉ふれあい会館にて
～自分らしさを求めて～

ゲスト：弁護士・子どもセンターパオ理事 多田元さん よりそいネットワークぎふ理事 原美智子さん

コーディネーター：ソーシャルワーカー 今井真美さん

【第 2 回目】2023 年 10 月 8 日（日）13：30～16：00 かみなり村北館にて
～ひきこもる若者をどう支えるか～

ゲスト：若者支援ネットワーク・岐阜大学准教授 南出吉祥さん

コミュニティハウス「ひとのま」代表 宮田隼さん

【第 3 回目】2023 年 12 月 10 日（日）13：30～16：30 不二羽島文化センター 401 にて
～映画「プリズン・サークル」からのメッセージ
～映画上映会と意見交流会

コーディネーター：元京都医療少年院ソーシャルワーカー 今井真美さん

【第 4 回】2024 年 2 月 25 日（日）13：00～15：00
～多重に困難を抱える子ども若者ひとりひとりの未来のために～

ゲスト：愛知 PFS 協会代表理事 星野智生さん
弁護士 杉本みさ紀さん

事業の成果

本研修会はオンラインと対面のハイブリッド形式で開催。参加形式を選べるため、これまでよりも参加者層が広がった。

第 1 回目は不登校をテーマに対談した。不登校特例校（学びの多様化校）やフリースクールなどを中心とした支援策だけでは不十分であり、選択肢がないゆえに不登校を選ぶしかない実情を知った。学校復帰にこだわらず家庭・地域においても多様な学びの機会を提供し、学びをとめないための支援を考えることが必要だと理解した。

第 2 回目のテーマはひきこもり。ひきこもっている若者を外に出そうとするが上手くいかないという事例を受け、ひきこもり＝悪という前提での支援に問題があると指摘。ひきこもっている理由やその背景を見、安心してひきこまれる環境をつくること、本人が自分のことや周り（他人や外の世界）のことを考えられるようになるまで待つことなど、ひきこもり支援の在り方を改めて考えさせられた。

第 3 回目は更生支援をテーマに掲げ、刑務所を舞台にしたドキュメンタリー映画「プリズン・サークル」の上映会を行った。受刑者へのインタビューや刑務所での支援プログラムの実践の様子から成るストーリーは、ひとりの人間の心の葛藤や変容を丁寧に描いていた。不適切な養育環境であったがゆえに大人や社会への不信感、憎悪ばかりが募

り、罪を犯す（窃盗、傷害、詐欺等）ことでしか自己表現できなかった、彼らの心の苦しみを知った時、彼らもまた被害者であったと気づかされた。

最終回となる第4回目は、居場所の在り方について考えを深めた。子ども若者の孤立を防ぐために子ども食堂や学習支援、居場所の運営など様々な支援策が各地で展開されているが、こうした居場所にでさえ、周囲（居場所を利用する他者）の目を気にして窮屈な思いをしている子どもたちがいる。大人目線での支援、すなわち大人が良いと思いつくった居場所に集まってこないのは当然。色々な背景を持った人が集まって来るのだから、学びと同様、居場所も多様性が必要。利用する人に合わせて居場所もかたちを変えていく（居場所は進化する）ことを学んだ。

成果の広報・公表

本研修会は、Zoom ミーティングによる参加と会場参加（対面）とのハイブリッド形式で行い、希望者にはアーカイブ配信を行った。研修会の様子を事業記録として残すこと、後日改めてその様子を視聴できる環境にあったことで、研修会で得た気づきや学びをより確かなものにするのができたと思う。

当法人の広報紙「くるーばあ」に、研修報告として記事を載せた。当法人の利用者、職員、ボランティア、地域住民等に配布し、その内容を共有した。その他にも、岐阜県内の各機関（福祉課、児童相談所などの行政関係）、特別支援学校、福祉施設（児童養護施設、障害支援施設、就労支援施設等）、支援団体など地域福祉に関わる人々にも配布した。また広報紙の記事は、当法人の HP にも掲載しており、地域住民に向けた情報発信も行った。

今後の展開

どのゲストも、本人の背景を見ることやその気持ちに寄り添うことを基本としており、支援者である前にひとりの人間という姿勢を大切にしていた。相手の考えや生き方を尊重することは、本研修会のテーマでもある「多様な学びと居場所づくり」に合致するものであり、困難を抱えた子ども若者の多くが、養育環境の影響により自分らしさを見失い自己否定感を強めていたことを考えると、周囲の無理解・無関心が「生きづらさ」を助長しているとも言える。第3回目で取り上げた映画「プリズン・サークル」には、家族や友だちに恵まれず自分の理解者がいないなかで育った若者たちが、刑務所に来て初めて自分の話に耳を傾けてくれる人に会ったことで、人間らしい心を取り戻していく様子が描かれているが、人としての優しさや温かさに触れたことが更生のきっかけを与えてくれたことに、直接的な支援（食糧、学習、就労、居住等）以上に自分のことを気にかけてくれる存在、誰かとつながっている安心感をずっと求めていたのだと分かった。（家族でなくても）彼らのそばに信頼できる大人がいたならば、また違う人生を選べたのではないかと思われてならない。

支援者としてのスキルや知識理解を高めることは、活動の充実を図るために必要なことであるが、地域に理解者や協力者を増やしていくことも同じくらい大切だと考えている。事実、本研修会を機に、ゲストと交流を始め活動の幅を広げる人や映画に感動して自主上映会を企画する人もいた。地域子ども・若者に関心を寄せる人、支援活動（ボランティア）に興味を持ち始める人、不登校・ひきこもりの見方を変える人、多様な生き方への理解を深める人、地域課題の解決に取り組もうとする人など、本研修会で得た気づきや学びが、人々を動かしてくれている。

これからも、地域住民の学びの機会として、研修会や学習会を定期的を開催していく。次世代を担う子ども若者が「生きづらい」と感じる社会に、ひとりでも多くの信頼できる大人を増やし、支援活動の輪が広がっていくよう、取り組んでいきたい。